

パネルディスカッション

水の文化を伝えていくための実践的プログラムづくり

【陣内】

今日は、こういう大変刺激的なタイトルでパネルディスカッションをやらせていただきたいと思います。

水に関する議論は日本でも本当に活発に行われるようになり、さまざまな学習活動もあるし、実践活動もあると思いますが、それを文化と結びつけて、その日本の環境や生活の本質までおり立って論じていくということはなかなかまだないと、先ほどの山崎事務局長のお話にもありました。今日、御登場いただいている方々は、皆さん、まさに実践的活動を先端でやっていらっしゃる方々ばかりでして、きょうのテーマも議論や理屈を超えて、もっと子供たちも大人も豊かな経験をして、自分の中でインテグレートしながら、本当に取り組んでいけるような、そういう場としての実践的プログラムづくりをどうやっていったらいいのかということ、今までの専門のお立場から大いに論じていただくという趣向だと思います。やり方として、まず嘉田さん、そして山道さん、私、それぞれが15分ずつプレゼンテーション、ケーススタディーみたいなことでお話をいただいて、それからそれぞれの方々の御発表の後に、この壇上にいる進士さんも含めてお互いに突っ込み合う、そこでいろいろ討論するというふうにしていきたいと思っております。

(映像を使つてのプレゼンテーション)

【嘉田】

1980年代の初頭です。私も農学から出ているので、カルチャーはアグリカルチャーそのもので、やはり根っここのところの農業と人と水と土とのかかわりを考えないといけないという、かなり理屈抜きの直感から、琵琶湖の環境研究に入りました。1988年に「水と文化研究会」という住民組織を地元の人たちとつくり、今日はそのことを少し交えます。実はその水と文化研究会の研究仲間、ほとんど家庭の主婦とリタイアした男性たちです。そこに子供が入ります。私自身はアメリカやアフリカの研究をしながら、結局琵琶湖でやってきたことを地元の人と一緒に共同研究としてひろげ、今は地元の人とともに世界を歩くようになりましたので、そのお話を少しさせていただきたいと思います。

宇宙から見た夜の地球を見ると、電気がついている所は、アメリカ、ヨーロッパ、日本。アフリカのほとんど、オーストラリア、これら電気がついていないところは、基本的には文明といわれる施設、たとえば水道はなく、どちらかというと、自然に密着した暮らしをしている所と考えていいでしょう。今日お話しするのは、アメリカの五大湖、シカゴの近くの事例とアフリカのマラウイ湖、それから日本、主に琵琶湖周辺の話です。

私は1973年から1976年までアメリカに留学をしていました。湖のある町で3年間暮らし、実はその時から薄々日本人と違うなと思っていたのが、水に関する考え方です。これは1988年の8月9日、シカゴのスタンレーパークの写真です。土曜日の午後、当時中学生と小学生の子供を2人連れて、博物館の調査に行ったのですが、そこである場面に出くわしました。目の前に湖があるスタンレーパークという公園です。ミシガン湖です。見てください。パイプいすをもちこみ、人によっては寝そべり、それから結界をつくって、その中でバスケットを持ってきて、ラジオを聞いたりしている。「何をしているのか」と尋ねると「Just looking at ただ見ているだけです」。ならば、この先にそれこそ水上ショーでもあるかという、何も無い。ただ、見ているだけ。これが私にとっては大変ショックでした。つまり、「水を見る文化」というものがある。近代というのは、視覚、見ることが五感の中で強調された時代だということを、フランスのある哲学者が言っていますが、どうもアメリ

カ、あるいはヨーロッパでも、現在は「見る」ということが大変強調されている。では、それに対して日本はどうか。

これは、実は 1961 年、琵琶湖の湖辺の大津市の仰木というところを写した写真です。今森光彦さんが「里山物語」というので紹介しているその場所です。この写真は 1961 年です。極めて巧みに水を使うという、その棚田の工夫をされているところ。もう一枚の写真は、後の時代の同じアングル、同じ場所です。あまりの違いに信じられないかもしれませんが、これが同じ場所だということは、実はこの圃場整備をした当事者が琵琶湖博物館におりまして、間違いないと太鼓判を押してくれました。山が切られて、住宅地ができておりまして、田んぼが真っすぐ四角になり、水は琵琶湖からポンプアップしている。

今映しているのは、湖の中にある沖島という人が住む島です。500 人ほどが住んでおりますが、そこでそれこそ琵琶湖の水を飲んで、お風呂を洗って、井戸も何もない、まさに湖の水で暮らしていた当時の写真です。1956 年の 8 月 5 日。この写真を見ながら、実はどういうふうに使っていたかというようなことをいろいろ聞いていくと、ここには生き物がいっぱいいて、おなべを洗うと、御飯粒一つでもあつという間に魚に食べられてしまったという。大変に生き物がたくさんいたんだということがわかりました。その生き物がたくさんいたことが、結果としてはこの水を飲める水にしていたというようなこともこういう写真から教わりました。この島に水道が入るのは昭和 36 年です。琵琶湖の水を簡易水道でくみ上げます。水道が入った理由は、女の人が水くみするのが大変というのが一つと、あとは昭和 30 年代は全国的に「国民皆水道」という政策の中で、直接水を使うことは衛生や労働面で悪いということで、水道化してきた。私はずっと地元を歩いていて、やはり水道化というのが水と人を隔てたまず最初のきっかけと思っています。次が下水道化です。もちろん必要な生活改善なのですけれども、そのときに十把一からげにすべてを捨ててしまったのが、今の水の問題の根源ではないかと考えています。そこで、実は昭和 30 年代の写真を集めてはその場所を探し、人を訪ねています。

今映している写真はお母さんが洗濯をしているもので、今津からマキノだということはわかりました。この写真を持って今津からマキノの間を何度も何度も歩いていたら、ある時、「あっ、これは私だ」という人に出会いました。そういうところがやはり徹底的に地元を歩くとおもしろい。もっと感激的な話は、この方は、この写真に自分は写されたのを知らなかったけれども、写真にも写っているこの乳母車は思い出に深いものだ。「実はええとこの乳母車(ええとことというのは、お大臣、お金持ちのところの乳母車で)、うちはそんなにお金がなかったから、こんな籐のいい乳母車は買えなかったけれども、ある朝浜へ洗濯に出たら、浜に打ち寄せられていた。神様が私のために贈ってくれたんやろうと思って、大事に使わせてもらいました。それで 8 人の子供を育てました」と言う。「この乳母車はないですか」と聞きました。物があつたら博物館としては何よりですから。すると、「8 人も育ててさびてしまったので、ほかしてしまつた」ということでしたけれども、流れ着いたものを神様からいただく。しかもそれをありがたく使わせてもらう。このあたりに、微妙な生活意識、湖とのかかわりが隠されている。この方は決して、「私たちは湖を大事に使うてます」「自然保護しています」と、そんなことは言いません。でも、具体的な生活の記憶と経験の中にそういうものが埋め込まれているのです。私が自分の仕事は埋め込まれているものをともかく、引き出させていただいて、形にして博物館であるとか、こうやってお話をさせていただくとか、本にするとか、それが仕事だろうということで、ともかく必死に 30 年前を引き出しております。

今の写真は、子供たちが遊んでいたところ。本当にどこもいっぱい人がいて、子供がいて、水辺はにぎやかだった。しかし、実はここは今辛うじて排水路が残るだけです。琵琶湖の湖岸の吉川というところで

すが、埋まっています。

さて、このようなことをいろいろ見ると、日本人の水との関わりというのは大変多様でした。それこそ水と大地と関わる人と、ものとのかかわり、いわば水と大地のある意味で物質の世界ですけれども、流したり、貯めたり、冷やしたり、それを食べて育てて、それが人と人とのつながりになり、争い、助け合い、洗ったり、飲んだりという出来事になり、その背景にはいわば精神としての祈りとか清めとか、これがすべてセットだったというのが日本の水文化だろうと思うわけです。アメリカの場合には過去 200 年しかつき合っていない。自分たちは新世界ですべて新しくつくってきた。ですから、19 世紀でも川ではほとんど洗濯をしていません。川の洗濯の写真を今必死で探しているのですが、アメリカではいまだに探せていません。ヨーロッパではセーヌ川、レマン湖の洗濯写真は、1950 年までのものがあります。つまり、洗濯しないということは、そこにある「意味距離」があるということだろうと思います。アメリカの場合、一番大事なものは地下水です。「地下水」こそが信頼可能。表流水への信頼は大変弱いということです。

この辺を考えると、大変荒っぽく言うと、水の文化を考えると、一種の「視覚強調型」、見る文化、「複合的な関わる文化」、それから実は「生業依存型」、食べる文化と言っているのですが、それがあってはいないか。次にアフリカの事例ですが、マラウイ湖というところ。水道がありませんから、お茶碗を洗うのも、水を浴びるのも、すべて湖です。水を汲んで家に運ぶ。魚がありますが、生だったらその場で食べられますが、電気もありませんので、天日乾燥をして、それで都会に持って行って売るといった状態です。それから料理は、例えば日に1回は魚を食べたいというような、そういう習慣です。ただし、なかなか食べられなくて、大体1日に1回は日本という、煮干しの2~3匹が1人に当たるくらいです。

去年アフリカに、琵琶湖で一緒にやっている水と文化研究会の人たちと行ったときに、ある人が、「これは30年前の琵琶湖と一緒にだね」という。そうなんです。そのことを思い出してほしかったのです。つまり、「トータルに水と関わるってどういうことだったろう」ということを、いわば逆にアフリカから「今」教えてもらおうとしているわけです。子供や女性の労働がきついというけれども、子供たちの目は輝いている。この辺が大変難しく、単純にどちらが進んで、進んでないとは、私は今言わないのですが。

さて、そのようにして、フィールドワークを行う時、目の前のことはとても大事ですが、目の前のことを見直すためにも、やはり遠くに気楽に行こうというのが私どもの基本的な姿勢です。よくシンク・グローバリー、アクト・ローカリーと言います。地球のことを考えて地元で行動しよう、これはもちろん温暖化問題などはそういうことが必要です。地球規模のデータの中から、自分の所でどうしようというのは必要ですが、私は今、逆だろうと思っています。シンク・ローカリー、現場から考える。なぜなら現場の物事はトータルに見える。個別の要素ではなくて、トータルに見えることをそのまま生活者の感覚を持って、では、アフリカに行ったらどうだろう、アメリカに行ったらどうだろうというような形でのシンク・ローカリー、アクト・グローバリーを考えようとしています。その時に、ふたつのタイプがあるようです。仮に科学愛好家型とおつき合い型と名付けました。

実はこの発見をしたのは、琵琶湖の周辺でずっと蛍の調査をやっているのです。どういうことかという、琵琶湖を歩きながら、先ほどのように古い写真を見ながら、昔はどうでしたかと尋ねる。そうすると人々が昔を語る時に出てくるのは、「水質がどうだった」という話ではないのです。2つポイントがあります。1つは「蛍がいっぱいいいた、オテジャコがいっぱいいいた、メダカがいっぱいいいた」と、生き物で語る。それからもう1つは、「ここで洗い物をした、お風呂の水を汲んだ」、つまり生活行動として語る。生き物として語る、生活行動として語るという所から、いわば地域に根差した形での自分たちの発見がもう一度できないだろうか。その1つが蛍だったんです。この蛍を1989年から3,500人の方に呼びかけて、今年もやっています。今日あたり

も、滋賀県はあちらこちらできっとにぎやかに活動していると思います。明らかに2つの好奇心の持っていく方があって、1つはどちらかという虫の生態がおもしろい、いろいろ温度を調べたり、水温を調べたりして、生態的データを出してくる人たち、これが「科学愛好型」。もう1つは別に虫の生態ではなくて、うちの子供と手をつないで行って、あれがおもしろかった、隣の人とお話できてよかったという。これを私は「おつき合い型」と名付けました。虫中心とは異なり、人中心なんです。ある意味でテーマは何でもいいんです。極端な言い方ですけれども、空港問題だろうが、虫だろうが、そうやって人と人とのつき合いの方を大事にしなから、ただ結果としてやってきことは、ここの虫の中心の人の知識なりと、おつき合い型の人の輪が合わさったときに、かなりトータルに行政に対してもものを言えるデータになっていくのです。あるいは、ものを言える運動になっていく。それがおもしろい経験でした。ですから、今のこの科学型の方は、こちらの虫と周辺の生息環境の方の構造を見ていく。それに対して、「私が」、あるいは「私の家族が」、「私の地域が」という人間の側からかかわっていく。大げさにいうと、これは文理、文系、理系の融合なんですけれども、このあたりのことをかなり意識的に考えていると、いろいろな多様な地域の方が関わってもらえるだろうと。

あとは、どんな形で虫調査をしてきたかということをごっとお見せしますけれども、結果として大事なものは、1人ずつが自分とかかわるということを大事にしている。つまり平均化しない、数量化しない、生のままでできるだけお互いの感覚なり、情報をぶつけ合うということが大変大事だろうというような発見をさせていただきました。ですから、楽しいフィールドワーク、科学愛好家型とおつき合い型、大きく分けるとそういう好奇心の違いがある。それから、ここにみずからの経験と原風景につながりがあるときに目が輝いてきて、教えてもらうのではなく、自分たちがやるということになります。私は、教育というものはかなり限界があると思っています。ですから、自分からつながりがある、そこから自分自身で問題意識を持っていくということが大変大事と思います。

さて、フィールドワークの企画と実践、今日のテーマですが、やはりどうやってテーマを発掘するか。できるだけそれぞれの地域の文化、生態的個性になじんだ形でのテーマが必要だろうと思います。それから、途中経過を共有すること。最近、幸いホームページなどでも自分たちでつくれるようになりました。こういうものをどんどん活動する。それから、関わりの進化。最初どうだろうかと「探検」をして、これは実は私たちの仲間が発見した言葉なんです、それでいろいろどうなっているんだろう、「発見」して、最後に「ホットケン」、つまり「たんけん、はっけん、ほっとけん」というような、そういうプロセスが展開していくことが大事です。それから、ここに「自分化」という、やはり自分たちにとってということがかなり地域活動で大事だろうと。そのときには、マスコミや書物や博物館など、社会的資源を有効に利用するというようなところも、ある意味で企画をする段階で必要だろうと思っています。

(注:この講演の直後に以下の本が出版されました。井阪尚司・蒲生野考現倶楽部編『たんけん、はっけん、ほっとけん』昭和堂出版 2001)

【陣内】

どうもありがとうございました。いかがですか。進士さん。我々は日本の中にいると、日本人が自然とどうつき合うとか、どうとらえてきたかということあまり認識しないまままきでしまっている、例えばシカゴの湖のほとりの Just looking という写真を見ると、確かに驚きますね。やはり日本人の水とのつき合い方は、違うのでしょうかね。

【進士】

私の考えでは、現象面は違って見えるが、本質的には人間は皆同じだと思っています。私は随分前ですが、山道さんなども一緒に多摩川の川べりのレクリエーション利用調査をやったのです。そのときにいろいろなことを見つけた。川べりに人が出る場所かというと大体橋の下が多い。それからテトラポットみたいなものが、護岸、一種の水制工として設置されていますが、そういう河原の場所から川べりに入っているわけです。それに利用者たちには、河原の中に作られた人工的なモノを伝えて自然の中に入ってくるという気がしたわけです。川は、ある規模の川になると大自然です。洪水のときは荒れ狂うわけでしょう。だから、私は川が大事だといっているのはそれもあるんですが、都市というのは全体的に人工的につくってしまう。その中に唯一本来的な自然、ワイルドな自然が入っているんです。夏に何回かの洪水で一回御破算になる、人間の余計なあかを全部流してしまうという川になるでしょう。か弱い人間にとってそういう荒々しい自然にはちょっと入りにくい。だから橋と棧橋とかテトラポットとか、ああいうよりどころがないと、なかなか川にはチャレンジできない。人間と川、非常に人間的な私と、大きな自然の間をつなぐものがある。野生とペットの間に家畜がいるというのと同じ。そういう仕掛けが水空間には必ず必要。もっとも近年はそのつなぎばかりが巨大化して、階段護岸とか、テラスを造ったり、親水公園と称していろいろやり過ぎ。つなぎが巨大化して、川本体をだめにしていく面もある。そのバランスがをとりませんとね。

【山道】

今、嘉田さんの五大湖のお話を聞いていると、今の奥多摩とそっくりですね。奥多摩が湘南海岸化したのはいつのことかわかりませんが、今のアウトドアグッズというのはすごいです。今の若い人たちはおしゃれです。それと同時に、やはり何もしないで眺めています。あれは欧米化したのか。僕はちょっと違うなと思うのは、多摩川の川べりで子供が何をしているか調査したことがあります。何もできないというのが実感ではないか。遊び方を知らないのではないかという印象をすごく受ける。ですから、施設をつくってあげても、どうやって遊んでいいかわからない。だから石を投げるしかないというぐらいで、辛うじて水面を飛ばすぐらいのことはやっている。川との関わり合い方が劣化していると同時に、希薄になっているのを、今の川遊びの実態を見ると、すごくよく感じるという感想を持ちました。

【陣内】

私も気がついたことが1つあって、前にパリのルーブル美術館で、中庭にガラスのピラミッドができましたね。周りが池になっている。なかなかいいデザインですが、非常に建築的です。夏だったのですが、その池におばちゃんたちがみんな足を突っ込んでいます。日本では見られない光景じゃないかと、これはえらく感激したんです。だからアメリカはああいうふうに、あんな文化なのかもしれない。ヨーロッパも似てはいるんだけど、何か違う面もあるのかなと。例えばローマの噴水が町中にありますけれども、子供ですが、水の中に入っている。日本の子供だったらやるかもしれませんが、大人は何か窮屈な水とのつき合いになっているんじゃないか。

【進士】

岡山市の旭川の真ん中に中州があり、岡山後楽園があるでしょう。後楽園の真ん中に曲水の宴を楽しむ流店(りゅうてん)という施設があるのです。形は曲水ではなくて真つすぐの水路があって、きれいな水を流

している。ここに行くと、夏などおばさんたちもみんな裸足になって水に浸かっている。私は、人間というのは、そういう意味では根源的に水に近づいて、きれいな水だと夏はごく自然に靴下を脱いで、水でチャプチャプしたくなる存在だと思います。ただ、その場所でそれが絵になるかどうかは、また別の話です。

【山道】

全国水環境交流会という会がございまして、その事務局長をやっています。私は1949年生まれですから51歳ですけども、大体同じ世代です。こういう人たちと全国的にお互い情報交換をしようといって、緩やかなネットワークをつくっております。今何団体あるかわかりません。会員制をとっていませんので、とにかく北海道から沖縄まで、そういう人たちと交流をしているところです。この人たちが今どういうことをやっているのかということ、今から御紹介をいたします。これは極めて論理的な発想に基づいたものではなく、ほとんどその体験に基づいた直感で、「やはりこういうことをやった方がいいのではないか、川はこうあった方がいいのではないか」というような会です。そういう人たちの思いを持ち寄って、何とか日本にいい川を残したり、あるいはつくっていい川ということです。最近「よい子は川で遊ばない」というような標語があちこちにありまして、その点からいうと、その人たちはほとんど悪い子だったのかということはあるんですが、そうではなくて、とにかく川で遊んだ思いというのが年をとってからとても強烈な体験であったり、ものすごく役に立っている。やはり実感として皆さんお持ちなんだろうと思います。そういう場を、少なくとも次の世代に機会として与えてあげたいという思いだろうと思います。理屈はその後から考えればいいというので、とにかく川に子供をほうり込もうというような事例を、今から御紹介したいと思います。これはいろいろなケースがございまして、後で御感想をいただければいいと思うのですが、まず子供たちに何かをしてあげようという発想ではなく、自分も一緒に遊びたいという思いも含めてやっておりますので、そういうつもりで見ただけだと、ますます興味がわくかなと思います。

これは十勝川で先般ボート下りをやろうということで、ここにはいろいろな人が集まってきました。とにかくボートに乗ったことがない人、北海道は広いですから、川で下るということはほとんどない。その一例です。これは、子供以上に大人が盛んに興奮して遊ぶ。この手の話は、川下り、上下流交流をボートで行うなど、全国で今やっております。特に中高年の方に人気があります。

これは、東京の東久留米市に落合川という湧水の川があるんです。ところが、この岸にネットフェンスが両側にありまして、子供は入っちゃいけない。まさに、「よい子は川で遊ばない」であつたんですが、町の委員会が年に1回特別にフェンスを外してもらって子供たちをほうり込もうということで、そのときの写真です。洋服を着て飛び込みます。中でも、今は女の子がものすごく元気です。まず女の子が網を持って魚をとって、男の子はバケツを持って待っている。どういうわけか男の子は靴下をはいて入るというか、非常にマナーがいいです。

これは、熊本の川です。これは、奥の方は湧水の川です。あまり流れはないんですが、その一角に丸太を単に横に通して河川プールをつくる。これは地元の人たちが水泳を監視しているんですが、向こうの川と底はつながっておりまして、この泳いでいるところに魚がいっぱい入ってきて、魚と一緒に泳げる河川プールです。これはちょっとした発想で、地元の自治会と市民がこんなものをつくと子供たちが喜ぶんじゃないかといってつくったものです。

これはちょっと違いますが、栃木の真岡市にあります自然教育センターです。鬼怒川のすぐそばにあります。そこで地元の人たちの指導で民芸品をつくったり、あるいはその鬼怒川で川遊びをしたり、そういうこと

を学校のカリキュラムの中に入れて、全市内の子供たちが1週間ここでこういう合宿生活をするんだそうです。いろいろなことを教わっている風景です。

これは多摩川です。洪水の後、川がどう変わるかということで、みんなで歩こうというような会。こういう会も行われています。川に行くと、楽しいことばかりじゃなくて、洪水のすさまじさみたいなこともあるんだよということを知る意味で非常に役に立っている。洪水の後を見る遠足みたいなものです。

これは、みんなで川を歩きながらわいわいやろうという会です。これは、行政と市民が一緒になって行きます。未来の川づくりのための市民と行政の共同のワークショップです。また、ごみ掃除は本当に盛んになっております。

これは江戸川ですが、どんな魚がいるかというのを漁師さんに投網を打ってもらって、見てみようというものです。思いがけない発見がありまして、こんなどぶ川にアユが上ってきている。そういう新しい発見が、今都内の川の中でボランティアの参加によって、こういう活動が地道に続けられています。環境学習の一環でやっています。

これは、市民団体がやっている救命救急法です。こういうのも市民がちょっと覚えておこうよということです。

これも多摩川です。箱眼鏡、ヤス突きです。川遊びの中で僕は発見したんですが、水遊びだけじゃなくて、川というのは火遊びの場所なのです。水と火とを一緒に遊べるというとてもすてきな空間で、大人の世界で火遊びというちょっとおかしいのですが、火の扱いを今の子供たちはほとんどできない。大人になってもこんなことを真夏の炎天下の中でやっている。この石の河原は45度Cぐらいあるんですが、そこでわざわざ火をたいて、バーベキューをやって、冷たいビールを飲むという、ほとんど理解に苦しむ世界なんです。河原で火を使うというのは、大人でも非常に興味のある行為だろうと。河原は都市では火遊びができる、唯一残された空間かなと思います。

これはちょっと昔の1986年の写真ですが、福岡の吉井というところなんです。この後ろは小学校です。その前にお尋ね書きがあります。これは僕が非常に気に入っているので紹介させていただきます。あそこに何が書いてあるかという、目の前に水路があります。これを渡って学校へ行くんですが、実はここに書いてあるのは、つい先日の何月何日の洪水のときに、うちのかっぱで名前を何とかタロウとかつけたやつが、実はこの水路に逃げてしまった。ぜひ探してほしいと、電話番号も書いてあるんです。通学路にも手配書きが置いてあるわけなんです。石像もちゃんと彫ってある。ちゃんと電話番号が書いてあるんです。ときどき、これはかっぱの手であるとおもむろにキリの箱を出してきて見せたりする。こういう遊びをやっている人たちがなぜ始めたかという、実は僕と同じ世代の人たちです。造り酒屋の社長と、和菓子屋の社長たちです。自分たちが子供のころはかっぱが怖くてしょうがなかった。今のガキにかっぱがいたという、実はそれは架空の生き物であって、伝説上の何とかと、要するにパソコンの何か画面から見たようなことを平気で言うので、頭にきたから、絶対にいたんだということを教えようということを、酔っぱらって話しあった、そのために仕掛けをどうすればいいのかというのが、先ほどの2枚の写真になるわけですが、徹底的にいたんだということを教える。場合によってはこういうカッパの手を出したり、大正12年の夏に最後にうちのひいおばあさんがかっぱの声を聞いたテープが残っている。「ぎゃー」というやつを聞かせるとか、とにかく徹底して本当にいるんじゃないかと信じさせたい。それを教えようということで、そういう仕掛けをするんです。ですからそんなものはどうでもいいんです。大正12年にテープがあったかどうかわかりませんが、だれもそれを覚えていないわけですから。ということで、今かっぱ博物館がこの吉井という町にできました。子供たちと、先ほどの水路

でかっぱ祭りを毎年やっているんだそうです。これは15年前にそういう仕掛けをした大人たちが、遊び心でやっているんです。そういう意味で、大人もあまり理屈っぽくなく、自分も楽しみながら子供と一緒にこういう仕掛けを行うことが、大人のセンスだろうと思っているんですね。

これは大分の大野川というところですよ。この向こう側に、きれいな景観の大野川が流れています。この上に昔は豚小屋があったんです。豚小屋を一生懸命に磨いていたんだそうです。それでそこを、要するに自分たちの市民団体の拠点にしようとしていたら、村長がやってきて、そんなみっともないことはしてくれないかと、豚小屋を何でビジターセンターに、そんなことを言ったらいいんですが、そのうち予算をつくって、こういうプレハブをつくってくれた。ありがたいのか、悲しいのか、よくわからないということなんです。かっぱハウスという、かっぱ小屋というをつくっています。これは、市民活動の拠点になっています。この中でいろいろなことをやっています。この間、私が行ったときには、ちょうどお役人さんの異動がありまして、ここはこういうものをつくっていいよという占用許可を出してくださったそうです。国土交通省の担当者が異動になるというので、市民団体から表彰をされていました。あなたは我々のためにこういうことを簡単に許可してくれた、ほかに行っても頑張りなさいとこういうような表彰状をやっていましたが、こういうすてきな空間があらちらにできています。

これは東京の多摩川です。こういう子供たちと交流する場所をつくってほしい。まず、多摩川のことを勉強しよう。これは府中の漁師さんですが、投網を打ってみなさいというので、子供用の投網をわざわざ用意して、投網の練習を芝生の上でやります。それで川に連れて行って、投網を打たしたり、そう簡単には打てないんですが、魚をとったり、この中に水中眼鏡をかけて、水中観察をやったりします。この水中観察が非常に受けている。水の中をのぞくということは、とても魅力的なものです。

それから、これは、全国でいろいろな活動をしているものを持ち寄って、年に1回、みんなでいい川づくりのコンテストをやろうと。今年は7月14日、15日、国立オリンピック記念青少年総合センターでやりますが、そういうパネルを持ち寄って、みんなで議論しようという風景です。ぜひ、お手元の資料を見ていただければと思います。これは第2回目です。この主婦の方々は、「私たちの川づくり」ということでやっています。

【陣内】

どうもありがとうございました。山道さんのお話を伺っていると、本当に川の中にどんどん入っていきたくなくなる気持ちにさせられる楽しいお話で、しかもこれが一番効果的だということも本当によくわかりました。かっぱといえば、法政の工学部におもしろい文化史をやっている若い研究者で横山泰子さんという人がいまして、もともと妖怪ばかりやっていたのですが、江戸の四谷怪談とか、この間学内でシンポジウムをやりました、そのときに対談で彼女と一緒に、江戸のフォークロアみたいな本でかっぱの話ばかりしてくれたんですが、江戸の中で、東京の中でどこからかっぱが出たかという研究があるそうです。かっぱというのは、江戸のような都会でも非常に重要な存在というか、だったそうです。

【山道】

そうですね。今、河童連邦共和国をつくっておられる方々がいて、おとし天草で国際会議がありました。国際会議とは、自分たち連邦共和国の国際会議なのですが、総理大臣から、国務大臣から、いろいろとバッジをつけて出てこられて、おれは千葉のかっぱだという、これが私より10歳、20歳以上の先輩方でありまして、私自身も愕然としたわけですが、まだそういうことを本当に楽しんでいる方々がおられると

というのは、僕はすごく大事なことだろうと思うのです。それを我々がどういふふう理解をするのか、これは笑い事じゃないです。そういうことをやはり次の子供たちにもぜひ継承できれば、とてもいい話かなと思うのです。

【陣内】

水というのは、やはり怖いというものがあるわけでしょう。畏敬の念もあるけど、何か引きずり込まれて水の中にはまってしまうみたいな。かっぱというのは、どういう意味として考えればいいのか。

【山道】

いろいろと言われるのですが、結局川での遊び方のルールというか、安全対策の一環だと思います。昔はフェンスも何もないわけだから、暗くなってくると、引きずり込まれるよとか、あるいはすべり落ちるのを防止するとか、1人でいるとだめだよとか、何かいろいろなマナーとかルールとか、そういうものの1つの自己規制というか、そういうことをわかってもらうための手段だということでしょう。

【嘉田】

近江でもかっぱがいっぱいいます、というかいました。ガワタロウと言うのですが、大体かっぱが住むのは水のふちとか、暗いところとか。それで今山道さんがおっしゃったように、かなり自分たちが気をつけなきゃいけないということは、制度として、今例えば学校で禁止をするとか、そういうことではなくて、親から子供に直接に日常の暮らしの中で「あそこに行ったら河太郎にしりを抜かれる」、それも「夜暗くなってからはだめ」とか、それからあとは「お盆のときにはあそこで泳いではいけません」とか、極めて個別にそれぞれ伝えられてきたわけです。そういうことが子供たちにとってリアリティーがあるのだらうと思うのです。私は、実は研究で伝説を集めております。伝説というのは、個別の時代と個別の人、あるいは個別の土地に根差している話です。だから、「昔々あるところに」ではないんです。「この場所に」、それから先ほど言った「大正12年」、あれは大事なんです。いかにもリアルに聞こえるでしょう。そういう話をどんどん引き出して、いかにリアルに語るという、それが子供たちにも訴えるんです。だから、このお便所で口裂け女が出たりというような話、これは現代社会でも随分どんどん物語ができてきて、子供の世界にも入っていくので、それは近代化したからという話ではなくて、かなり人間として共通のうまいやり方をしているなと感心をしておりました。

【進士】

かっぱはわかりませんが、かっぱが出にくくなっているというのをどうするか。東京で涙を流せるような水があるかというのと同じで、かっぱが出やすいところがあるかどうかなんです。深川の木場あたりを流れているたくさんの掘り割りがあるのですが、私はあそこで随分木場の絵をかきました。今は木場が新木場に移ってしまって、すっかり様子がわりしてしまっただけです。かっぱが出やすい場所が、多分そのころはあった。角乗りだって、筏師だって、いる雰囲気がかつてはあったのです。今は木場あたりも、みんなマンションです。かっぱは出ようがない。だから、先ほど川へ出て子供が遊べないというけれども、我々のころは本当にどこでも川があったんです。いろいろなサイズの川があったんです。いきなり大きな川に出なくてもよかった。ヒューマンスケールの小さな川があった。私などは兄と二人乗りして自転車でそのまま川に突っ込んでしまったことが一度ならずありました。自転車を乗りたてのころはすつと入っちゃう。そういう体験を繰り返してい

たわけでしょう。今はそれができません。問題はそこなんです。

【陣内】

それで思いだすのですが、僕自身が東京の川に興味を持つ1つのきっかけになったのは、船で佃島からずっと回ったわけですが、神田の御茶の水のあたりにすばらしい溪谷というか、急な斜面が緑地になっていますね。その辺をずっと回ったときに、神田出身の歴史家、郷土史家の方によってずっと船について回ってもらい、思い出を語ってもらったんです。先ほど古い写真の思い出を語ってもらうという、そのインパクトというのがあると思うんですが、僕らは船に長老の歴史家に乗ってもらって、歴史家としての知識だけじゃなくて、その思い出話をずっと語ってもらったんです。一つ一つの場所で生き生きとよみがえってくる。その中に、その御茶の水の駅の向こう側、今文京区が頑張ってる緑地化している、あそこは子供のことはターザンごっこをやる場所で、転げ落ちちゃったやつもいるという話を聞きまして、ああいうすき間、今でも入ろうと思えば入れそうなんです、そんなことを考える元気な子供も残念ながらいまいませんね。

自分は建築なものですから、自然河川というわけにはなかなかいかないので、町の中の川で非常におもしろい動きが見えるミラノの例を御紹介したいと思います。

ミラノというと、ファッションとかデザインで非常に注目されるわけですが、実はミラノで地元の人たちに今一番人気があるスポットというのが、このナビリオという運河沿いです。ここは真つすぐつくりされている運河ですけれども、ミラノというと、本当に運河がたくさんめぐっている町だった。我々日本人は、高度成長期に近代化でどんどん掘り割りを埋めちゃったという何かあきらめとか、自分たちだけが環境を破壊してきたみたいで思いがちですが、実は全然そんなことはなくて、ヨーロッパでも近代にかなり運河を埋めたり、破壊してきたわけなんです。ミラノも東京、江戸や大坂と同じように、本当に運河がめぐってまして、ここの大聖堂をつくるのにも船で大理石を運び込んだわけなんです。1940年ぐらいまでにはかなり埋められちゃったんですが、幸い3系統ぐらい残っていたんです。それを地元の住民、市民、それから行政、それと建築家たちが頑張って、30年ぐらいかけて随分よみがえってきておもしろい空間になって、今ミラノの人たちが喜んで行くスポットになっているわけなんです。これはダルセナといって、こちらから船がずっと入ってくるんですが、ここが船着き場で、ここで荷を上げて、いろいろな経済活動をやっていたというわけです。

先ほど、アメリカでは洗濯を川でしなかったという嘉田さんのお話でしたが、イタリアでは少なくとも19世紀の末ぐらいまでだと思んですが、洗濯をやっていたんです。今映している写真はミラノのナビリオ・インテールノという、たくさんめぐっている運河の1つです。岸辺に女性がいっぱい出て洗っているのです。それからトレビーズという町にも同じような、あるいはフィレンツェでもアルノ川でも洗っていたんです。だから、親水性という言葉はいろいろな使い方があるでしょうが、その水と身体的にヨーロッパの人たちも結構近かったなというのでびっくりさせられます。

彼らはすっかりそれを忘れちゃったわけなんです。これはレオナルド・ダ・ヴィンチがミラノを都市計画的に構想したプランです。これはいわゆる閘門、船が水位を調整しながらどんどん上がっていくシステムをレオナルド・ダ・ヴィンチが考えたスケッチですが、そういうのが残っているというか、さすがにレオナルドはルネサンス的な人間で、何でもやった。先ほどインテグレートすることの重要性というお話がありましたが、水門のデザインから、都市全体の水のシステムまで考えちゃったわけなんです。そういうレオナルド・ダ・ヴィンチのデザインが、受け継がれている閘門がちゃんと残っているんです。これはサンマルコ地区というんですが、こういうものを壊さないで大切にしてきたということがようやく今反映されて、人を引っ張る原動力にもなってきて

いる。

この写真は先ほど見たダルセナという船着き場です。この辺りは荒廃して、人もあまり寄りつかないようなところだったんですが、ここを辛抱強く再生していったわけです。週末になると、今やロンバルディア地方、このミラノの周辺の若者がたくさん押しかけて、大変な騒ぎになって、うるさくてしょうがないからというので、せっかくこの辺に居住してきた人もその騒音が嫌で、出ていくぐらいの始末だそうです。そのぐらいに人気がある。ミラノという町は海もなければ、大きい河川もないので、このぐらいの運河が本当にみんなが待ち望んでいた場所だったんです。水の空間というのがやはりほっとさせる、何か行ってみたくなる、そういうわくわくさせるような場所もあるというわけで、そのためにはいろいろなプランが提示されたし、ミラノの建築学部の連中も、先生も、学生も、いろいろなプロジェクト、案を提案し、行政側もサポートし、そしていろいろなイベントがなされ、ようやくこういうふうになってきたんです。これは水上に浮かぶレストランです。

日本の場合、水の問題は水だけで考えてしまうのですが、やはり周辺の環境と一体となって再生し、魅力をアップするという、ある意味では都市計画的、あるいはもっと住むという、そういう単に歩く、見る、演ずるだけじゃなくて、周りに住んでいるということも重要だと思うのです。これはもう1つ内側の水路ですが、やはり洗濯場だったそうです。それを残したんです。これがいい小さなランドマークになっています。周りのその住宅は、みんな港湾労働者の庶民地区だったわけですが、それが現代の居住、ちょうど都市にアパートを探すのには格好のスケール、格好の雰囲気です。そういう形でよみがえってきています。

やはり水と結びついて成り立っていた空間というのは、ほどよいスケールを持っていたと思います。この辺はそもそも労働者地区なので、庶民住宅で、あまりでかい貴族の邸宅がない、かえってこういうのは今のモダンリビングにはいいんです。

ちょっと外れますと、まだまだいいストックがいっぱいありまして、まだ穏やかないい感じで人々の下町的居住が続いているんですが、あまり一気に活性化しない方がいいと思うんです。じわじわと。日本の場合は困ったことに、例えば1980年代にウォーターフロントブームがあり、芝浦などは非常にヒットしたわけですが、もう忘れられているわけです。それはディスコに行くとか、ライブハウスに行くとか、そういうことだけで、あるいはギャラリー、非常に非日常的だったんですが、もっと町の中にそういうものが中心になって入ってきて、周りに住んでいる、しょっちゅう行く、自然な雰囲気、だけどしゃれていると。それで水と出会えるという、これから水を使うイベントが出てきますが、そういう雰囲気が必要だと思うんです。

行政側もサポートしまして、いろいろなイベントを市民と住民と一緒にやってやったわけです。今写っている写真は、年に何回も行われる骨董市ですが、水際の空間を上手に利用しています。真ん中に運河があります。

それから、夏はバカンスに行かない庶民の人たちのために水際の空間を利用して、仮設レストランや空間をつくって、ダンスパーティーとかライブ的なコンサートをやるとか、そういう水際の空間を上手に使っています。これは、カヌーの大会です。日本だったら、ぼんと水の中に入ってしまうということもあり得るかもしれませんが、これは自然河川じゃなくて、都市の中の掘り割りなので、このぐらいが限界かと思います。それでも、イタリアのいろいろな町を見ていると、カヌーで楽しんでいる都市河川が本当に多いんです。東京の空間、日本の都心の水際の空間というのも、せっかく日本人がこれだけ湧水感覚、ただ見るだけではないというのを持っていたわけですから、もっともっと手を入れる余地があるのではないかなと。ここを見ている、まずは住民、市民です。それから、都市計画的にもサポートする行政があつて、そしてやはりいろいろなアイデア、プランニングということになれば、これは専門家の助けもいるわけで、そういうのがミラノの場合は非

常に地道に30年かかってうまくいった例じゃないかなと思います。

今までの皆さんのお話とは異質だったかもしれませんが、きょうのテーマが「水の文化を伝えていくための実践的プログラムづくり」ということで、1つ都市的な文化の中の水、ミラノの人たちも石の都市ですが、水とのつき合いというものを大切にして、それが実際によみがえってきたという例で御紹介しました。

【嘉田】

先ほどの洗濯の写真は何年ですか。

【陣内】

19世紀の終わりごろだと思います。

【嘉田】

19世紀の終わりぐらい。実は、今100年前のヨーロッパの水辺の写真を集めて、その同じ場所の撮影をして、今度2001年11月に琵琶湖畔で行われる世界湖沼会議で発表します。セーヌ川15点、レマン湖15点、それからアメリカ15点、アフリカ15点、日本ということで、それで見えていくと、意外とヨーロッパは水辺で洗濯しているんです。セーヌ川もレマン湖もいっぱいあるんです。それがここ40年ぐらいです。1950年ぐらいまでは洗濯しているんです。私は何で洗濯にこだわるのかというと、実は先ほど進士さんがおっしゃったように、人が水に近づいていくきっかけは、子供は魚をつかむ、女の人は洗い物に行く、そういういろいろな生活の中の活動の延長として、日常的なものがあるかないかが随分違うんだろうと思うわけです。というようなことで、近づくということがやはり気持ちとして愛着、大事にということになり、これは世界共通、人類共通だろうと思います。関わりながら近づき、そこに愛着をはぐくむ。それで最終的に「自分たちがやっていく」、行政でも、研究者でもないという、そのところが共通なのではないかなと思っています。

【陣内】

しかし、今、関わりが日常的に普通の生活の中ではなくなくなってしまっているわけだから、そうするとこれは関わりをつくらなきゃいけないわけですね。

【嘉田】

そうですね。そのつくるのに原理的な工夫が必要で、私は子供にとってはとにかく「生き物がいてほしい」と言っています。魚がいたら、どんどん入っていきますね。オタマジャクシでもいいんです、カエルでもいいんです。生き物がいることが大変大事です。実は滋賀県で、6,000人の人たちにどう遊んでいるかという調査をしたんです。今の子供と、その両親と、祖父母の3世代で。圧倒的に魚をつかめるということが一番記憶にも残るし、楽しい。おじいちゃん、おばあちゃんたちは、50年たっても、60年たっても、70年たっても、しっかりと覚えています。だから子供にとっては生き物が大事だろうし、女性にとっては、最近洗濯なんかしんどいよ、ただし足をつけるとか、それから子供が遊ぶ姿を見るのが楽しいというのがあります。そういうところでその気になったら幾らでもできるし、先ほどの山道さんのスライドなどを見ていると、ようやくここ10年、私は水辺で遊ぶ子供は「絶滅危惧種」といっているんですが、生き物のことだけを見ないで、子供のいないことを問題にする人たちも出始めたようです。最近ようやく大人の方も教育委員会が禁止するのを

やめたりして、少しずつ社会が変わりつつあるので、将来に対してはいい方向に行くかなと期待しています。逆に、過去 30～40 年が異常だったという感じがいたします。

【陣内】

子供が中に入っていく姿を見ていると大人も喜ぶ、だから大人も行くということもあるけれども、大人がもっと積極的に興味を持ち、関わっていく方法という、先ほどかっぱのおもしろいアイデアというのがありました。が、どんなふうな可能性があるでしょうか。

【山道】

僕の先輩にお話を聞くと、やはり川で遊ばなくなったのは学校にプールができてから、昭和 40 年代かなという話がある。その間学校のプールで泳げるけれども、川で泳いだことがない世代が2世代ぐらい、あるいは3世代ぐらいになっている。そうすると、もう川のいろんなことが伝わっていかないだろうということです。それはそれでいいと思うのですが、最終的に我々の記憶からしても、川で美しく楽しく遊ぶなんていうことはあり得なくて、結局はとにかく魚をとるとか、何かをとるということに夢中になった。その過程で、それがどうやって工夫をすれば魚がとれるのかということ、これが結局遊びといえば遊び、楽しみといえば楽しみであったらと思う。そういう意味では、親水整備の話で進士さんはやりすぎだとおっしゃったけれども、あれはそこまできちんと子供が倒れたときに、とにかく鼻まで水が来ないぐらいの水深で、しかも石は均一で深みもなければ、ときどき消毒して大腸菌のいない水を流すべきであるとか。そうではなくて、川の楽習の楽というのは、明るくて陽気ということではなくて、もう少し摩訶不思議な、ひょっとしたら恐怖感を覚えるような淵とか、木のオーバーハングしたところだとか、あるいは、いわれがあるところだとか、そういうのもあわせ持って楽だろうという気がします。そういうあたりを知ることが大事なような気がするのです。五体と五感をすべて使えるような場というか、そういう川とか水辺というのは今でも豊富に存在するという気がするんです。

それから、今「川に学ぶ体験活動協議会」というのがありまして、これはNPOの人たちが、昔一生懸命川遊びをした人たちが何かやろうということでやっておられるのですが、その活動は、実はこれは教育委員会とか、学校教育のレベルでは多分なし得ないだろう。事故対策や保険の問題とかも出てくる。そこら辺で詰めていくと、どうしても明るく楽しく安全で、清らかにというような形になってしまうものですから、恐らくその楽のところを達成できないだろう。それは市民がいろいろな人たちと合意をしながらやっていくしかないのかなと。ここら辺が、僕は今皆さん頑張っておられる原動力になっているのかなという気がするんです。昔、嘉田さんが我々の全国大会のところに、お子さんと捕虫網を持って、突如として会場にいられて、だれかタガメがいるところを知らないかというような叫び声を上げられたのを覚えているのですが。

【嘉田】

名水百選の大会で、島原の大会です。

【山道】

どこかにタガメはありましたか。

【嘉田】

1987年頃です。次男が小学校2年生だったのですが、その子はもう大学生になっています。彼に、学校に行くよりも、お母さんと来る方がおもしろいよといって、大体仕事のときに子供をあちらこちらに連れて歩いたんです。当時タガメを探してまして、アメリカにまで探しに行ったんですが、最終的にいたのは目の前の、先ほど仰木の写真を見せましたが、今森光彦さんが写していた、例の里山の棚田にいました。というようなことで、足元を見ましようという、もう1つの教訓でした。

【陣内】

いろいろとお話を伺っていると、日本の各地で皆さんの御努力もあって、こういう活動が本当に活発になって、ワークショップとか、自発的な活動が多いですね。僕は嘉田さんとも先ほどお話をしていて、日本の方がかえって欧米より、こういう自発的な環境を、教育というのではなくて、自分たちで発見し、自分たちで育てていく自主的な動きがすごく多いような気がするんです。その辺のこととか、だけでもう1つ今度そういう空間を行政側としては人々が行きやすい、アクセスしやすい、そしていい空間、あるいはビオトープみたいなことも含めたみたいなことで、環境をつくっていくといえますか、場合によっては整理するという、だけどそれをやり過ぎると、かえって人間と川、あるいは自然との関係がだめになるという進士さんのお話もあったわけですが、こういうワークショップ的な、あるいは自発的な活動、進士さんはどんなふうに評価されるのかということと、それからその最後の環境をこれからつくっていく、実際に計画していくというときにどんなことを考えたらいいのかというあたりで、ちょっとまとめていただけますか。

【進士】

大きくいうと都市そのものは人間がすべてにわたってコントロールしようとしてつくってきたと思うんです。例えば、その1980年代にウォーターフロントブームになったけれども、何となくそっぽかった。結局、ロフト感覚がいいのではないかとか、およそ輸入のコンセプトでした。持ってくると、東京の台場あたりはサンフランシスコのとまったく同じですよ。ちょうど新しい世紀に入ったところでこのあたりのことは考えた方がいい。先ほどのお2人も大体そういうコンセプトのように思うんですが、結局その土地に根づいた川とのつき合い方というのがあって、ときどき10年、20年切れても、また戻ってはくるわけです。ここはあまり悲観的になる必要は私はないと思うんです。ただ、つくる側、つまり都市を改造したり、デザインしたりする側は、どうしても絶えず新しい情報を取り入れて、例えば西海岸スタイルでデザインをしたくなる。

現代の都市デザインは、川まで同じ手法でやってしまった。川はやはり都市とコントラストの空間だった。あるいは、自然の領分だった。それなのに川まで造り込んでしまった。これは引き算の方がいい。川にはものがない方がいい。一切何もするなどは言わない。治水、利水のための、つまり水関連施設は当然です。水をとりたければ堰が必要だし、川を渡るためには橋も必要です。人工化はいけないとは言わない。ただ、川にないというか、川にあるべきでないものまで入れてきてしまった。それが、下手すると映画のセットにまでなってしまった。ああなってくると、親水風景とはいいながら嫌みになってくる。

吉原というのは川向こうのアシ、ヨシが生えていて、地価の安い埋立地につくったんです。これは非日常です。水のおもしろい点は、水商売とか水茶屋とか大体非日常なんですね。江戸も京都もそうです。高野川など祇園あたりを流れていますが、ああいうところはずっとお茶屋になっているでしょう。それでいて片方では水の神がいて、水源地のように非常に聖なる世界があるんです。言ってみれば、水源の聖なる世界から

だんだん俗っぽくなって、海辺は最高に俗っぽくなるんです。それが洲崎なんです。ちょっと細かい、ローカルな話で恐縮なんですけど、洲崎弁天町というのが江戸時代に、富岡八幡宮近くにできるんです。そこには遊郭ができるわけです。ヨシの生えるようなところを吉原とお目出度い文字にかえて遊郭を作ったのです。洲崎弁天町もそうです。そうやって、海辺海辺に非日常空間が進出したんです。その非日常空間は、管理しないところに意味があったわけです。今の都市空間では、海の空間、ウォーターフロントでも、すべて同じような均質のデザインに徹底してきてしまったところに問題があると思っています。

河原者はどういう風に生まれたか。河原は、無税の地。行政の管轄外だったわけです。税金がかからない土地だった。だから田舎から都に飛び出した人たちは、最初は業を持っていない、お金がないから河原に住んで、芸能などで稼いで生きたのです。

日本庭園の場合もそうで、山水河原者といえます。庭をつくる労働者です。河原で河原の自然石のところがりを、また島の形までを観察していた人たちです。それが庭の石組など造形に反映されたのです。京都の銀閣寺の庭園をつくった世阿弥は、その河原者の代表です。彼は一流になって、将軍の足利義政とも口をきくぐらいの身分になりますが、それでもまだ河原に住んでいた。そのぐらい身分差別が激しかった。だけれども、逆にものをつくるクリエイティビティーの点では負けなかった。身分差別社会の中では、ものをつくる、芸能の世界では低い身分のものでも頑張れるわけです。また芸能の道でしか、上昇できないということがあったのです。脱線しましたが、川はそういう世界です。そういう自由であり、なおかつものをつくっていく、この創造性をたくましくする世界がこれからは求められるわけです。現代社会からそういう世界が消えつつある。現代は管理され過ぎているでしょう。やはりその遊びというか、もうひとつの空間が都市の中にはあるべきだと思います。それがオープンスペースの基本的な意味なのです。

【陣内】

どうもありがとうございます。きょうは、本当にいろいろなヒントになるお話をいっぱい伺えたと思います。このテーマはいろいろとお話を伺っていると、ある意味でどんな立場の人も、気持ち次第では関われる、非常に広がりがある、可能性のあるテーマです。特にこのミツカン水の文化センターが柱としていく上でも格好ですし、ミツカングループの社員の方々が全国にいらっしゃるわけですが、例えばそういう企業の方々も自分たちの地域で活動を開始できるのではないかという、それはあくまでミツカンは1つの例ですが、どんな企業の方でも、どんな職場の方でも、どんな分野の方でも、何かこういうことの可能性を少しでもインプットされれば、あしたからでも動きたくなるようなテーマだということをつくづく思いました。長時間、本当にどうもありがとうございました。